

かいとう  
怪盗レイヴン①

さいきょう かいとう たんじょう  
最強の怪盗コンビ、誕生!?

あきぎ しん  
秋木 真・作

しそ 装画 りりと riritto・挿絵



アルファポリスきずな文庫

# 目次

0	プロローグ	0	06
1	行方不明	0	08
2	ノートの名前	0	15
3	『不破幹也』	0	22
4	怪盗レイヴン	0	31
5	真実	0	43
6	春香の決意	0	52
7	明るい兆し	0	61
8	怪盗レイヴンを始めた理由	0	68
9	春香の覚悟	0	79
10	わたしにどこかあるかと	0	86
11	アジト	0	91
12	下見と出会う	1	02
13	怪盗レイヴン、動く	1	12
14	ターゲットのゆくえ	1	33
15	脱出	1	45
16	エピローグ	1	57
	あとがき	1	68

とう じょう じん ぶつ しょう かい  
登 | 場 | 人 | 物 | 紹 | 介

不破幹也



朝霧春香



パソコンが好きな中学一年生。  
行方不明の兄を探している。

幸樹の友人。クールだけど  
実は面倒見がいい。

あさ ぎり こう き  
朝霧幸樹



はる か あに ひ  
春香の兄。ある日、  
とつぜんゆくえ ふ めい  
突然行方不明にな  
るが……

さわ だ なな み  
沢田七海



はる か ゆうじん  
春香の友人。いつ  
あか げん き  
も明るく元気。

いし かわ み つき  
石川美月



シロサキ・グループ  
のビルで出会った  
少女。

## 0 プロローグ

「ねえ、これ買ってよ」

スーパーマーケットで、わたしはお菓子の箱を持って、買い物かごを持つお兄ちゃんのとこりに持つていく。

「またか？ 一つだけだぞ」

**お兄ちゃん**はそう言つて、優しくほほ笑む。

わたしはお菓子もうれしかつたけど、お兄ちゃんが向けてくれるその笑顔がうれしかつたんだ。

買い物を終えて、わたしとお兄ちゃんは荷物を分けて持つて、道路を歩く。

二つ年上のお兄ちゃんは、いつもわたしより多く荷物を持つてくれる。

わたしが持つとうとすると、

「危ないから」

とやんわりと断られてしまう。

両親は共働きだから、いつも夕ご飯はお兄ちゃんとつくつていた。

といつても、料理はお兄ちゃんのほうがうまい。

だから頼りがちになつてしまうけど、それでも野菜を洗つたり、炒めものをしたり、食器を洗つたりと、お兄ちゃんと一緒にキッチンに立てるのがうれしかった。

「春香。学校はどう？」

食事のときには、いつもわたしを気にかけてくれる。

優しいわたしの自慢のお兄ちゃん。

だから、わたしは今でも信じられない。

——そんなお兄ちゃんが、いなくなつてしまったことが。

# 1 行方不明

「ただいま」

わたし——朝霧春香はマンションに帰ると、だれもいないとわかっている玄関であいさつする。

返事がないままリビングに向かい、だれもいないのを確認して、ため息をついた。

そのまま自分の部屋に向かう。

中学の制服から動きやすい服に着替えて、リビングにもどった。

がらんとした部屋の中を見まわす。

変わらずだれもない。

お兄ちゃんがいなくなつてから、一週間がたった。

一週間前、いつものように学校が終わって帰宅したわたしは、リビングでお兄ちゃんが帰るのを待っていた。

いつもなら四時過ぎには帰ってくる。それなのに五時になつても、六時になつても、いくら待ってもお兄ちゃんは帰つてこなかった。

そのうち、仕事が終わつたお母さんが帰ってきて、お兄ちゃんが帰つてないことを知つて、あわてた様子でお父さんや中学校に連絡をしていた。

なんでお兄ちゃんは、帰つてこないの？

わたしには、さっぱり意味がわからなかった。

警察にも連絡して大きわざになつたけど、その日お兄ちゃんは帰つてこなかった。

次の日には、テレビのニュースにもなつた。

『中学三年生の朝霧幸樹さんが、昨日から行方不明とのことです。中学校から下校して、そのまま行方がわからなくなつたとのことで、警察は事件の可能性もふくめて捜索と聞き込みを行つています』

アナウンサーの男の人の言葉を聞きながら、やっぱりわたしにはわけがわからなかった。それから、目まぐるしく時間が流れた。

だれもお兄ちゃんがなくなる理由に、心当たりはなかった。

とくにわたしは警察に何度も聞かれたけど、泣きそうになりながら「なにもわからないです」としか答えられなかった。

一週間がたつても、お兄ちゃんの行方はわからないままだった。

それだけ日がたつと、ニュースでも取りあつかわなくなるし、ウワサ話もされなくなってきた。

こんなときでも、お父さんとお母さんは仕事に行かなくちゃいけないかったし、わたしだって学校に通わなくちゃいけないかった。

でも、お兄ちゃんはいないままだ。

「どうして……」

わたしは、リビングのソファに深く腰かけて、祈るように目をつむる。

そうしないと、涙があふれてきそうだったから。

しばらくしてから目を開けても、リビングにはだれもいなかった。

わたしは、のろのろとリモコンを手取る。

テレビをつけると、ワイドショーをやっていた。

「最近、怪盗が街をにぎやかさせているのはご存じですか？ その名も怪盗レイヴン。正体不明の怪盗ですが、面白いのはこの怪盗が盗むものです……」

テレビの中で、女性アナウンサーが説明している。

怪盗レイヴンは、ここ数カ月で有名になった怪盗だ。

レイヴンはワタリガラスの英語名で、カラスをモチーフにした衣装を身に着けているという話だった。

盗むのは悪事の証拠という変わりものの怪盗で、世間での人気が高いらしく、よくワイドショーで特集されていた。



怪盗レイヴン

「そういうえば、お兄ちゃんは怪盗レイヴンのニユースを熱心に見ていた気がするな」  
もしかして、ファンだったんだらうか。

そんなこともいつでも話せると思ってたから、聞いておかなかった。  
胸がキュッと苦しくなって、わたしはテレビを消してソファから立ち上がる。  
そのまま、お兄ちゃんの部屋に向かう。

わたしのとなりの部屋で、ドアには『KOKI』と書かれたプレートがかかっている。

ドアを開けると、部屋の中はお兄ちゃんがいなくなったときのままになっていた。

警察もふくめて、何度も部屋を調べたけど手がかりはなかったらしい。

机の上は片付いていて、教科書やノートが棚にたてかけてある。

整理整頓されているのは、几帳面なお兄ちゃんらしい。

わたしはなんとなく気になって、机の上の棚にならべてあるノートの中の一冊を手取る。

そのノートをパラパラと、めくってみる。

ノートの中身も、きれいにまとめられている。

……あれ？

わたしは、おかしな点に気づく。

「この国語のノート、お兄ちゃんのじゃない」

ノートに書かれている字が、お兄ちゃんの字とはちがった。

今まで、どうして気がつかなかったんだらう。

ノートの中身を、一冊一冊確認しようなんて思いもしなかった。

そんな余裕もなかったし。

だから、今まで見落としていたみたい。

でも、このノートつてだれのなの？

ノートを閉じて、表紙を見直してみたけど、『国語』としか書かれていなくて、名前はな  
かった。

ノートを裏返すと、裏表紙のところに目立たない字で、『不破幹也』と書かれていた。

お兄ちゃんの友達は何人か知っているけど、聞いたことのない名前だ。

もちろん、わたしが知らないお兄ちゃんの友達だっている。

おかしいとまでは言えない。

でも、ノートを持つているというのは、それなりに親しいからじゃないのかな。

——不破幹也。

この人は、いったいだれなの？

## 2 ノートの名前

「ふああくあ」

次の日の朝。

わたしはあくびをしながら、起き上がる。

昨日は夜更かしたせいで、体がちよつと重い。

わたしは立ち上がると、机の上にあるノートを見た。

『**不破幹也**』のノートを、思わずお兄ちゃんの部屋から持ち出してしまった。

勝手に借りるなんて本当はいけないことだけど、どうしても引つかかったんだよね。

……ううん。ただほかに手がかりがないから、無理やり関係があると思おうとしているだけかも。

それでもいい。

今はまちがっていても、前に進みたい。

なにもしないで、ただ待つるだけなんてたえられないから。  
朝食を食べると、わたしは家を出た。

学校に向かいながら、昨日の夜に調べたノートのことを考える。

あのノートに書かれていたのは中学三年生の教科書の範囲だったけど、うちの学校とは習う場所が少しちがっていた。

つまり、お兄ちゃんとはべつの中学の生徒ってことだ。

ますます、どこで知り合ったのか気になる。

だけど、わたしにはほかの中学の先輩の知り合いなんていないからなあ。

どこの中学なのかわからないし。

あてずっぽうで探すにも、県内の中学だけでも数十はあるよね。

わたしはため息をつきつつ、学校に着くと**一年三組の教室**に向かう。

教室には、十人ぐらい生徒がいた。

まだこのぐらいの人数だと、さわがしいってほどじゃない。

わたしはあいさつしながら、窓際の自分の席に行く。

「おはよー！ 眠そうな顔してるね」

席に行くと、後ろの席の**沢田七海**が元気よく声をかけてくる。

ポニーテールにした短い髪に、くりくりとした大きな瞳が印象的な女の子だ。中学に入學してから、**趣味**が同じだったこともあって、すぐに仲よくなった。

「七海、おはよう。昨日、調べものしてて……」

わたしはあくびをおさえつつ、答える。



「もしかして……お兄さんのこと？」

七海が声をひそめて、聞いてくる。

もちろん、わたしのお兄ちゃんが行方不明なのは、クラスのみんなも知っている。なんなら、学校中にだって知られているはずだ。

あれだけテレビのニュースでやったし、ウワサにもなってるだろうからね。

「そんなとこ」

わたしは、あいまいに返す。

正確には、お兄ちゃんの友達のことなんだけどね。

あっ……そうだ！

「ちよつと、聞いてもいいかな」

「いいよ！」

七海は、質問の内容も聞かずに返事をする。

これは七海がいい加減なわけじゃなくて、わたしが変な質問なんてしないと信用してくれている証だ。

『『不破幹也』つて名前、聞いたことない？』

「ふわ……みきや？ うくん……どうだったかなあ」

突然出てきた名前に、七海はとまどった様子で考えこむ。

期待しているわけじゃない。

ただ、聞ける相手には聞いておこうと思った。

「その不破さんが、どうかしたの？」

「え〜とね……」

わたしは、かいつまんでノートのことを話した。

「お兄さんの部屋にまぎれていたノートの持ち主ね。……うくん、不破幹也。どこかで聞いたことある気がするんだよね」

「ほんと!？」

「ちよつと待って。今思い出すから……」

七海はこめかみに指をあてて、目を閉じる。

わたしは、そんな七海を見つめてじつと待つ。

「あつ、思い出した。塾だ！」

七海が顔を上げて、わたしに言った。

「塾？」

「通ってる塾の成績優秀者で貼りだされている中に、その名前があつたんだよ。まちがいないよ！」

七海が通っている塾なら、同じ中学生だよ。

しかも、このあたりの中学校だ。

「どこの中学校の人かわかる？」

「たしか、白鳳中学校だっと思うよ」

「私立の名門じゃん！」

わたしはおどろく。

白鳳中学は、とりの駅が最寄りの、県内でも進学校として有名な私立中学だ。

チェック柄のブレザーがおしゃれで、制服も人気があるんだよ。

「そうそう。だから覚えてたんだよ。成績もトップだったし」

「トップ!? 頭がいいんだ」

ノートの内容が、理路整然としてまとまった内容だったから、頭はよさそうだなとは思ってたけど、まさか塾でトップの成績の人なんだなんて。

お兄ちゃんも学校の成績はよかつたから、そのつながりなんだろうか。

でも、お兄ちゃんは塾には通ってないから、どこで知り合つたのかわからない。

「同じ名前っていうだけの、可能性もあるけどね」

考えこむわたしに、七海が言う。

それもそうだ。

同姓同名はめずらしいとはいえ、ないわけじゃないし。

手がかりが見つかったかもしれない、とついわたしが熱くなつちやつたことに、七海は気づいていたみたい。

ノートの持ち主か確認するためにも、とりあえず、**放課後に白鳳中学に行ってみよう!**

### 3 『不破幹也』

白鳳中学の前に着くと、下校する生徒からげげんな顔を向けられた。それもそうだよな。

ふつうは他校生が、学校の前にいることつてないだろうし。

ここから、どうやつて『不破幹也』を探そう……

いきおいで来ちやつたけど、顔も知らない相手を見つけるのは、無謀すぎるかも。せめて七海に写真を持っていないかとか、聞けばよかつた。

でも、あんまり七海に迷惑をかけたくないからなあ。

とにかく、このままじつとしていても、しょうがないよね！

今は下校する生徒がいつぱいいるから、声をかけて『不破幹也』について聞いてみるしかない。

わたしは、気合を入れなおす。

そうしないと、さつきから向けられている、たくさんの生徒たちの「だれ？」という視線に負けちゃいそうだな。

だれに話しかけるのがいいだろう？

わたしは、下校する生徒の中から話しかけやすそうな人を探す。

できれば、三年生がいいよね。

ノートの内容から考えても、『不破幹也』は三年生だから。

男子にいきなり声はかけにくいから、女子がいいけど……あの人どうかな？

話しかけやすそうなボブカットの女子が一人で校門から出てくる。

三年生かはわからないけど、年上に見える。

「あの……すみません」

ボブカットの女子に、話しかける。

「……わたし？」

声をかけられた女子は、おどろいた顔でわたしを見る。

「あの、聞きたいことがあつて。不破幹也さんという方を探しているんです。たぶん、この

中学に通っているはずなんです。知りませんか？」

「不破君？ 知っているけど……あつ、ちょうどよかった、あのんだよ」  
女子は、校門の手前を歩いていている男子生徒を指で示す。

「あの人が……」

——不破幹也。

「もういい？」

「は、はい。ありがとうございます！」

お礼を言うと、女子生徒は立ち去る。

わたしは、不破さんに視線を向ける。

茶系の明るい髪は、耳が隠れるぐらい長い。目は切れ長で、見るからに、落ちていた雰囲気のある男子生徒だ。

大人っぽすぎて、話しかけづらく感じる。

それでもお兄ちゃんと同じ合いかどうか、確認しないと。

そのために、ここまで来たんだから。

わたしは意を決して、不破さんの元へ歩いていく。  
すぐに不破さんは、わたしに気づいて顔をこちらに向けた。

ちがう学校の制服を着た女子生徒が、まっすぐに向かってきているんだから、気づくのは当然だ。

品定めするような視線にひるみそうになるけど、両手をにぎりしめて、そのまま進む。

「あの……不破幹也さんですか？」

わたしは不破さんの前まで行って、声をかける。

「そうだけど、君は？」

不破さんは見た目の印象とちがって、少し



ふつきらぼうな口調で問い返してくる。

「朝霧春香といます」

「朝霧？ 記憶にないが」

不破さんが、げげんな顔でわたしを見る。

あれ？ わたしの勘ちがい……ううん！ そんなはずないっ！

「朝霧幸樹を知っていますよね？ 妹です」

不破さんの目が見開かれる。

それで確信が持てた。

やっぱり、この人はお兄ちゃんのことを知っている！

「覚えはないな。その朝霧幸樹とはだれだ？」

不破さんはとぼける。

「そんなはずないです！」

わたしはいきおいこんで、不破さんに詰め寄る。

「どうしてそう言い切れる。君とは初対面だろう」

「証拠があります。今出しても……」

たたみかけようとしたところで、不破さんが先に言った。

「わかった。べつの場所で話そう。ここだと目立つ」

そう言われて、わたしはまわりから、かなりの視線を集めていることに気づいた。

あちこちから、興味津々といった視線が向いてきていた。

「他校から告白してきたのかな？」なんて声も聞こえてくる。

かあつ、と頬が熱くなる。

さすがに、お兄ちゃんのことを、こんなに注目されている中で話せない。

わたしは、コクリと首をたてにふった。

不破さんに連れてこられたのは、近くの公園だった。

広い公園で、散歩している人や走っている人はいたけれど、こちらを気にする人はいなかった。

「ここなら、人目を気にせずに話せそう。」

不破さんは、噴水が見える木陰で立ち止まった。

「朝霧春香さんだったか。どうしておれが、朝霧幸樹を知っていると思っただ？」

「これが、お兄ちゃんの部屋にあつたからです」

わたしは、バッグから『**不破幹也**』の**国語**のノートを出して見せる。

ノートを見た瞬間、不破さんが顔をしかめる。

表情の変化に内心でおどろいていると、不破さんが言った。

「わざわざ、ノートを返しにきてくれたわけか」

その言い方に、わたしはムツとする。

「そんなわけあると思いますか？ 兄が行方不明なことは、知っていますよね」

思わず、声の調子が強くなる。

「おれが、なにか知っているだけでも？」

不破さんは、犯人あつかいされたと思っただのか、目つきがするどくなる。

思わず体がすくんだけど、ここで引き下がるわけにはいかない。

「わかりません。ただ、今は手がかりがほしくて……」

言いながら、目がうるんできて、あわてて手の甲でぬぐう。

不破さんは、わたしの様子を見て、気まずそうに頭の後ろをかいた。

「……そうだよな。悪い。きつい言い方をした。たしかに幸樹とは友人だが、行方について

はおれはなにも知らない」

さつきよりだいたいぶ丁寧な言い方で、答えてくれた。

不破さんは、やはり**お兄ちゃんの友人**だったらしい。

でも、なにも知らないんだ……

そうだよな。

そんな都合よく知っているわけない。

わかっていたはずだ。

「そう……ですか」

期待していたわけではなかったけど、また手がかりがなくなってしまう気分が沈む。

「しかし、あいつは本当にどこに行っただろうな」

不破さんは、空を見上げてため息まじりに言った。

心配している口ぶりだけど、違和感を覚える。

なんだろう？　なんか今、変な気がした。

引つかかるっていうか……

でも、それがなにかすぐにはわからない。

「もういいか。塾があるんだ」

「お時間ください、ありがとうございます」

わたしは、ノートを不破さんに返す。

立ち去る不破さんの背中を見ながら、わたしはもやもやを感じていた。

なにかを見落としてる？

そんな気がするのに、それがなんなのかがわからなかった。

## 4 怪盗レイヴン

家に帰ってから、奥歯にものがはさまったみたいにな、すっきりしなかった。

なんだろう？

なにが引つかかっているんだろう。

単なる気のせい？　それとも……

わたしはリビングのソファにすわって、不破さんとの会話を思い出さず。

不破さんは最初、お兄ちゃんのことを知らないふりした。だから？

でもそれは、いきなりたずねてきたわたしを警戒してのことだろうし、不自然ってわけ

じゃないよね。

お兄ちゃんについて、心配しているように見えなかったから？

そもそも、不破さんとお兄ちゃんが、どの程度の友達だったのかわからない。

そこまで仲がよかつたわけじゃないなら、ずっと心配しているっていうのは難しいんじゃない

ないかな。

わたしは家族だから心配で気が気じゃないけど、みんなそうじゃなきゃおかしいとは思わないし。

じゃあ、なにが引つかかっているんだろう。

そのあとに、不破さんはなにを言っていたっけ。

手がかりがなくなつて、沈んでいるわたしにこう言っただ。

『しかし、あいつは本当にどこに行っただろうな』

違和感を強く覚えたのは、このときかも！

でも、心配しているだけだし、おかしいところはないような……あれ？

わたしはそう考えてから、胸がざわつとする。

なんで不破さんは、『どこに行っただろう』って言い方をしたのかな。

まるで、お兄ちゃんが自分の意思でどこかに行っただかのようにも聞こえる。

今、お兄ちゃんは行方不明だ。

どうしてかの理由もわからない。

わたしたち家族が心配しているのは、お兄ちゃんが事件にまきこまれたんじゃないかってことだ。

無事でいてくれるかってことだ。

なのに、不破さんはちがった。

不破さんは無事かどうか心配せずに、行き先を心配しているかのような言い方だった。

**それに違和感があったんだ！**

もちろん、こんなのは言い方の問題なだけだし、無事かどうかより行き先を心配したからって、だめなわけじゃない。

ただ……気になるよね。

不破さんに、もう一度会ってみる？

でも、よく考えたら連絡先を交換してないし、家の場所だつてももちろん知らない。

お兄ちゃんの部屋を探せば見つかる？

でも、あんまりお兄ちゃんの部屋のものを動かすと、勝手に動かしちゃダメって、

ママに怒られるんだよね。

明日また、白鳳中学に行ってみる？

それが一番、ふつうのやり方だ。

ただ、会えるチャンスが今日みたいにあるとは限らない。

ノートを返してしまったから、不破さんからしたら会う理由がないとさけられてしまうかもしれない。

まして、お兄ちゃんの行方についてなにか知っていて、**秘密**にしているならなおさらだ。だつたら！

わたしはソファから立ち上がって、自分の部屋に向かう。

棚に置いてある、ノートパソコンを手取る。

パソコンはわたしの一番の趣味だ。四、五歳ぐらいからさわってきた。

小学生向けのプログラミングの大会で、何度か優勝したこともある。

このノートパソコンは、中学入学のお祝いで買ってもらったもので高スペック。今のわたしの**相棒**だ。

わたしはパソコンを立ち上げると、指をおどらせるようにキーボードをたたいていく。

「これかな」

さつき不破さんと会っていた公園。

その近くにある**防犯カメラの映像**を見つげ出すと、いくつかをこっそりとぞかせてもらう。

次々と画面を切り替えていき、不破さんの姿を見つけて止める。

「これが十分前の映像だから、まだこのあたりにいるかもしれない」

わたしは、防犯カメラに不破さんの姿が映ったポイントを見つげるたびに、地図アプリにチェックをつけていく。

それで、だいたいは不破さんの行動範囲がしぼれる。

あとは……

わたしは、いつも外に出るときに持つていく青いリュックサックを手取る。

「やっと見つけた、手がかりかもしれないんだから」

わたしは、玄関から外に飛び出した。

「このあたりだよね」

わたしは、防犯カメラの映像で不破さんを見た場所の近くにやってきていた。

住宅街は日が暮れていて、ちよつと肌寒い。

スマホの時計を見ると、夜の八時過ぎ。

わたしは、上着の襟元をよせて、あたりを見まわす。

足早に帰宅する人の姿はあるけれど、不破さんの姿は見当たらない。

もう家に帰ったのかもしれない。

防犯カメラの映像は十分前ぐらいのものが多かつたから、すでにいなくても当たり前だ。

まだこのあたりにいたら、と思っただけど、冷静に考えたら不破さんを見つけても、どうに

かなったわけじゃないんだよね。

今すぐにたしかめなげやって気になっただけで、不破さんに会えたとしても、はぐらかさ

れたらそれで終わりだ。

家を出るときは、なにかつかめた気になっていただけ、ぜんぜんそんなことなかった。

急速に、気持ちしがしぼんでいく。

帰ろう。

くちびるをキュッと結んで、わたしは来た道をもどる。

その途中――

道路をはさんだ反対側の歩道に、黒ずくめの男の人が足早に歩いていくのが見えた。

黒いパーカーに、黒いズボン姿で、フードをかぶっている。

全身が黒かったから、なんとなく目にとまった。

あやしいというほどじゃない。

そういう格好の人は、いないわけじゃないし。

ただ、その背格好に覚えがあった。

不破さん？

探していたからかもしれない。

すぐに、頭の中で不破さんと黒ずくめの人の姿が重なった。

見つけたっ！ と走り出そうとして、足が動かなかった。

今不破さんに声をかけて、どうするの？

さっきの会話の違和感を伝える？

素直に不破さんが、話してくれるなんて思えないよね。

そもそも、違和感だつてわたしの勘ちがいや、思いこみかもしれない。

そこまで考えて、わたしはちがうことが気になった。

こんな時間に、不破さんはどこに行くんだらう？

買い物だらうか。

それにしても、なんだか様子が変だし、服装も目立たないようにして、こそこそしている

ような……

なにかある？

わたしが、不破さんを疑っているから変だと思ふのかもしれない。

もしまちがっていたら、精いっぱいあやまろう！

だから、今は少しだけ調べさせてもらおう。

わたしは、黒ずくめの不破さんが歩いていったほうに向かって、走り出した。

不破さんのあとを追つたものの、とつくに姿はなくて見失つてしまった。

あたりも暗くなつて、余計に人を見つけるのはむずかしくなつていた。

それにこれだけ暗くなると、歩きまわるのもちよつと怖い。

「あつちの路地を確認したら、もう帰ろう」

わたしは、大通りから一本入った道路を確認してから帰ることにする。

路地に入ると、思ったよりも暗い。

カラン。

風で空気が転がる音かして、肩をびくつとふるわせる。

やっぱり引き返そうか、と思つたところで……

カツンツ。

頭の上から、鉄の板をけるような音がした気がして、わたしは空を見上げる。

ふわり。

頭上から、黒いなにかが降りてくる。

……なに？



おどろいて固まっていると、目の前にそれが現れた。  
黒いコートに、黒いズボンの黒ずくめ姿で、真っ黒な仮面をつけていた。  
この姿って……

テレビのニュースでやっていた。

世間をさわがせているってウワサの……

「怪盗……レイヴン。どうして？」

突然の出来事に、心臓の鼓動が速くなる。

わたしのつぶやきが聞こえたのか、怪盗レイヴンはちらりとだけこちらを見たが、すぐに走り出して暗闇の中に消えてしまう。

怪盗レイヴンが、どうしてこんなところに……

しばらくたつてから、ようやくわたしの頭と体は動き出す。

「不破さんを探していたら、怪盗レイヴンに出会うなんてね……」

わたしは、思わず苦笑いする。

怪盗レイヴンがレアなのはまちがいないけど、べつにそっちは探してなかったんだけどな。

そんなことを思っている、さつき怪盗レイヴンが立っていた場所に、なにかが落ちてい  
ることに気づく。

なんだろう？

わたしは、落ちているものをひろう。

プリントされた紙で、塾の名前とともに「次回の模試について」という案内が書かれて  
いた。

「これって七海が通っている塾だよね……」

そしてそれは、不破さんが通っている塾でもある。

さつき目の前に立った、怪盗レイヴンの姿を思い浮かべる。

コートを着ていたし、顔は仮面で見えなかった。

でも……わたしの中に一つの推理がうまれる。

「まさか怪盗レイヴンって……」

## 5 真実

夕方の白鳳中学前。

わたしは学校が終わってから、不破さんに会うためにまたここに来ていた。

二度目でも、やっぱり正門から出てくる生徒の目が痛い。

学校が終わっていいそいで来たけど、もしかしたら不破さんとはとくに帰っている可能性も  
ある。

だれかに、聞いたほうがいいかな？

そんなことを考えていると、多くの生徒の中から、昇降口から正門に向かって歩いてくる  
不破さんの姿を見つけた。

ちがう中学の制服を着ているわたしは、思った以上に目立つらしい。

不破さんは、すぐにわたしを見つけると、顔をしかめた。

あきらかに歓迎されていない。

それでも、不破さんはまっすぐにこちらに来てくれた。

「なんの用だ。昨日で、用件は終わつたはずだろう」

不破さんは、突き放すような口調で言う。

「昨日見たんです」

「昨日？」

不破さんの表情からは、とぼけているのか本当に心当たりがないのかわからない。

「怪盗レイウンです。ここで話してもいいんですか？」

わたしは、まっすぐに不破さんを見つめる。

不破さんは、そんなわたしを見ると、面倒くさそうに目をそらした。

「場所を変えよう。ついてこい」

そう言つて、不破さんは歩き出す。

わたしは、あわてて不破さんのあとを追いかけた。

つつきり昨日と同じ公園に行くのだと思つたら、ちがった。

不破さんに連れてこられたのは、**十階以上あるマンションの前**だった。

「……どう？」

わたしは戸惑いつつ、マンションを見上げる。

「おれの家だ。人に聞かれる場所です、話すこともできなそうだからな」

わたしの疑問に気づいたのか、不破さんが説明する。

不破さんは、そのままマンションのエントランスに入つていく。

オートロックになつていて、わたしは締め出されないようについていく。

エレベーターに乗り、七階で降りる。

**七〇三号室**の鍵を開けて、不破さんは中に入つていく。

ドアの前で、ためらう。

そんな簡単に入つていいんだろうか。

「来ないのか？ それなら、話は終わりだ」

「行きます！」

ためらつてる場合じゃない。

「お兄ちゃんの行方が、かかっているんだから！」

「マンシヨンのリビングに通される。」

ソファにすわつて待つてっていると、不破さんが制服から私服に着替えてもどつてきた。

「麦茶でいいか？」

「……はい」

緊張しつづつ、答える。

ほかに、家族の人は家にいないんだらうか。

いたら、内緒の話なんてできないわけだけど。

不破さんは、麦茶の入ったコップを二つ持つて、もどつてくる。

そのコップの一つを、わたしの前のテーブルに置く。

「あの……家族は？」

「おじさんもおばさんも、働いているから帰りはおそいよ」

「おじさんおばさん？」

「おれは養子だからな。両親は事故で昔に亡くなっている」

「ごめんなさい！」

わたしは、あわててあやまる。

「べつに。聞かれたら答える程度には、自分の中で整理はついている。それで、怪盗レイヴンがどうしたんだ？」

「え？」

急に話が変わつて、わたしはすぐに反応できない。

「怪盗レイヴンを見た、と言つていただろう」

「は、はい。昨日の夜に路地裏で。それで、怪盗レイヴンが立ち去ったあとに、これが落ちていたんです」

わたしは、昨日ひろつた**塾の模試の案内のプリント**を、不破さんに見せる。

不破さんは、そのプリントをちらりとだけ見て、興味なさげにコップを手にする。

「ぜんぜん、動じた様子がない。」

……わたしの推理は、的外れなのかな。



不安が心をおおう。

だけど、ここまで来てためらったってしようがない。

わたしは意を決して、不破さんを見て言った。

「このプリント、昨日落としましたよね？」

「塾の模試の案内プリントか。知らないな」

不破さんは、肩をすくめる。

「昨日、怪盗レイヴンが落としていったんです」

「なおさら、おれが知るわけがない」

「そうでしょうか。ここって、不破先輩が通っている塾ですよ」

「そうだな」

不破さんは、あわてた様子もなくうなずく。

「なら、これを警察に届けてもいいですか。怪盗レイヴンが落としたと言えば、警察は塾に通っている人を調べると思います。そうしたら、なにかわかるかも……」

わたしの言葉に、不破さんが顔を上げて、わたしをするどい目で見ると、  
にらみ合うような形になったけど、わたしは目をそらさない。

ここで引いたら、ダメだ。

ひざの上の手を、ギュッとにぎる。

しばらくして、不破さんが目をそらして、ため息をつく。

「それはやめたほうがいい。幸樹にも迷惑がかかる」

お兄ちゃん？

「どういうことですか？ どうして、そこでお兄ちゃんの名前が出てくるんですか！」

わたしは、ソファから立ち上がって、身を乗り出す。

「これから聞くことは他言無用だ。守れるか？」

「話によります」

聞く前から、約束なんてできない。

「冷静でいい返事だ。それでいいさ。どうせ話さない」

「聞いてから考えます」

わたしは、不破さんに言いくるめられないように、慎重に答える。

不破さんは、そんなわたしを見て小さく笑う。

「昨日、君が会った怪盗レイヴン。それはおれだ」

「……えっ？」

すぐには理解できない。

不破さんが怪盗レイヴン？

たしかに、わたしはそう推理していた。

だから、今日だって不破さんのところに来たんだし。  
でも、こんなあつさり認めるなんて……  
まだ、いくらでも白を切れることはできたはずだ。  
「どういう……つもりですか」

わたしは、探るように不破さんに聞く。

狙いがわからない。

「裏なんてないさ。もう一つ伝えることがある」

伝えること？

「怪盗レイヴンは一人じゃない。おれは君の兄の幸樹と、怪盗レイヴンをしていた」

「……えっ」

まったく予想していなかった話に、わたしはあつげにとられる。

そんなわたしに、たたみかけるように不破さんが言った。

「怪盗レイヴンは、おれと幸樹でつくりあげた怪盗だ」